【特別講義要旨（2）'96.10.30】

人口と文明のゆくえ

河野稠果
（麗澤大学国際経済学部教授）

人口と文明は手に手を取って増加し発展を遂げてきた。人口のある程度の集積がないと文明は生じない。その集積は今日の都市のプロトタイプであろう。しかし，文明が形成され発展すると，人口が飛躍的に増加する素地を作った。

人口はいくたの文明の段階で，実は成長と停滞をくり返したが，18世紀の産業革命によって勢威を増した近代科学技術とそれに伴う目的合理主義と普遍主義は全世界を覆う現代の文明となっている。多くの地域で人類は多産多死から少産少死への人口転換を経験し，疾病と出産の大部分をコントロールできる状況に達している。20世紀の半ばに西欧で医療革命が起き，その影響を受けて途上地域では急速な死亡率低下がもたらされた。これが昨今の世界人口爆発を招来した。しかし近年途上地域にも家族計画思想が拡がり，出生率低下と共に増加率も顕著に減少し始めている。人口爆発の危機は去りつつあるといってよいのではないか。

しかし20世紀も終わりに近づいた現在，これまで予期しなかった新しい地球的規模の難問題が生じた。自然環境と生態系の破壊である。それは一つには先進国の大量生産・大量消費・大量廃棄のつけであるが，同時に途上国の人口増加と貧困による本来農業に適しない土地や資源の無計画な利用によってもひき起こされている。このままで行くと今から100年くらいのうちに資源は涸渇し，自然環境は破壊され，人類は滅亡するのではないか，というシミュレーションやシナリオが続出した。人類が滅亡すれば，文明も最期を遂げる。現在の科学技術文明は，人間による自然支配の哲学を基本にしており，このパラダイムに立つ限り人類の破局は必然だとの考えもある。

それに対して最近起こった思想は二つある。一つは「持続可能な開発」であり，もう一つは女性のエンパワーメントあるいはフェミニズムの強化・普及である。前者は，これまでのような資源・エネルギー多消費，環境破壊型の20世紀工業文明に基礎をおく経済開発パターンを転換し，人類の生存と人間社会の豊かさを持続可能とする新しいパターンを模索する試みである。後者は女性の地位の強化と役割の拡大を通じて，家父長制の家族の殻を破り，途上国の出生率低下を促進し人口増加を低減させようとするものである。

フェミニズムが地球を救うかどうかは分からない。それは途上国では有力であるが，先進国で

は現状では女性の就業と出産育児のギャップを拡大して，出生率をさらに低下することが予想される。女性が家庭外就業とキャッシュを得る喜びという禁断の木の実を食べたのであり，それが人口をどんどん減少させることになれば，フェミニズムは西欧文明（それは世界の文明である）を衰亡させることになる。